

高見島応援団 「さざえ隊」

高見島

水夫と大工で栄えた集落の歴史を 紐解きながら、じっくり島歩き

港近くの浜集落に集中する実人口は30数人、平均年齢80歳以上という高見島。高見島応援団「さざえ隊」の目標は、そんな高見島の魅力を広く発信すること。そのためにアート鑑賞に訪れる人たちのおせったいや花壇づくり、島内ガイドといった活動を会期後も続けている。代表を務める西山市朗さんと隊員の菅原優子さん、高見島出身者のふたりに島内を案内してもらった。

瀬

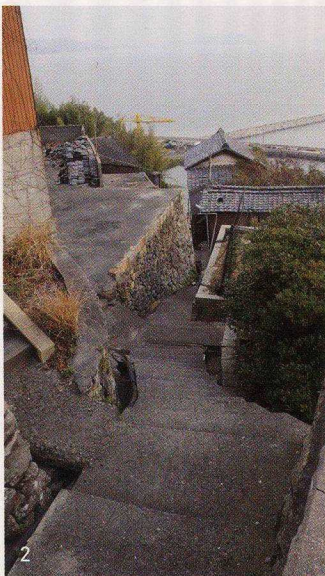
戸内国際芸術祭2013の秋会期には、この高見島に延べ2万4000人が訪れたという。多くの来島者たちがガイドブック片手に急斜面の集落を歩き、屋敷の中のアート作品を鑑賞してまわった。さざえ隊の仕事は、島内のおせったい処で来島者に高見島ならではの茶粥を振る舞い、島内ガイドを実施することだった。13年1月に結成されたさざえ隊の人員は約20名（現在は40名余り）。うち数名は高見島出身だが在住者はおらず、現在、全員が海を隔てた多度津町などで暮らしている。

「芸術祭が故郷の高見島を盛り上げる絶好のチャンスになると思い、友人・知人に呼びかけてさざえ隊を立ち上げました」と話すのは、隊の代表を務める西山さん。芸術祭以前から、頻繁に島へ戻って実家の補修をしたり、港の近くに花壇をつくったり、島内ガイドを手掛けたってきたという。

西山さんによれば、高見島は「かつ

て江戸前期頃までは水夫の島として栄え、商人の台頭とともに徐々に大工の島となっていた」という。明治以降はこの「塩飽大工」たちが香川県や岡山県、関西方面へ手を広げて大活躍したという。が、今日では過疎化が進み、島民の多くは港近くの浜集落に住み、北側の山の中腹に家が集中している浦集落はほとんどが空き家となっている。とはいえ、石垣を駆使して山の斜面に階段状に家々を建てた浦集落の景観は実に見事。『瀬戸内少年野球団』『男はつらいよ―寅次郎の縁談』『機関車先生』などいくつもの映画の舞台になったのも納得できる。そのため、かつて重要伝統的建造物群保存地区の指定の話が持ち上がったそうだが、「集落景観を維持していくのが難しい」という理由で断念したという。「急斜面で細い路地が多いため車が入れず、維持・補修に必要な資材や道具を運ぶのも困難である上、島の高齢者が日常的な手入れを担うこともできません」と

島の景観を守っていきたい。



山の中腹に石垣と屋敷が立ち並ぶ浦集落の景観。芸術祭でアート作品が設置されたことで、浦集落の荒廃には一定の歯止めがかかったといわれている。考えてみれば傾斜と見事な石段、高台からの景観や多数の古民家といった要素は、アート作品の舞台としてのおもしろみにつながる。アーティストたちの作品が古い集落と融合することで、形を変えながらも景観が維持されていくような仕組みは構築できないものだろうか。

積極的な魅力発信が何より大事!

えがおの会代表(多度津町議会議員) 渡辺みき子さん



えがおの会の活動風景。右から2番目が渡辺さん(写真左)

私は高見島に生まれ、中学校を卒業するまで島で育ちました。当時は1000人くらいの島民がいたと思いますが、今では数十人にまで減ってしまいました。また、私は多度津町を元気で笑顔あふれる町にしたいと「えがおの会」と銘打ち、そのつど友人・知人を誘って、お祭りの手伝いやお掃除など、地域のためになることならなんでも参加してきました。故郷の高見島でも石階段の掃除や草抜きのほか、恒例行事となっている高見島・佐柳島合同運動会の司会役も毎年務めています。

前回の芸術祭のときには、週末に茶粥のおせたいを手伝いました。かつての小学校の先生方やOBなどにも声を掛けたところ、30人もの「高見島大好きなボランティア隊」が集まってくれました。茶粥を準備する時間を利用して観光客の方たちに高見島のよいところを話したところ、皆さんとても喜んでくれて、あらためて魅力を発信することの重要性を認識していただけます。これからもラジオに出演したりイベントに参加したりする際には、積極的に高見島の魅力をPRしていきたいと思っています。

西山さん。
だが、その歴史を紐解きながら路地を散策するのはおもしろい。香川民俗学会会長も務める西山さんは、歩きながらたたくさんの話をしてくれた。たとえば、素人目にもほかに比べて高度な技術で整然と積まれた石垣の屋敷を指して「アメリカのシアトルに移住し、農場経営で成功した中塚氏の屋敷です。屋根の瓦細工も特注で、実に凝った趣向をしています」と。また、急階段の坂を登りながら「この上には、幕府から西周や榎本武揚らとともにオランダに留学生として派遣された山下岩吉氏のかつての住居があるので、私はオランダ坂と呼んでいます」と。西山さんと一緒に案内してくれた菅原さんも「私の祖父は塩飽大工でしたが、1926年(大正15年)に船大工として乗り込んだ貨物船が約1カ月も太平

洋を漂流し、アメリカの貨物船に救助された事件が記録に残っています」とエピソードを披露。立派な構えの屋敷を見つめながら話を聞いていると、この高見島から多くの優秀な人材が世界を駆け巡った時代の栄華が想像されて、実に興味深い。
こうした解説を聞きたい人のために、西山さんたちはさざえ隊の事務局を多度津町立資料館内に設置。「なるべく多くの人に高見島のことを詳しく知ってもらえるよう、ガイドを希望する団体からの連絡をいつでも受けられるようにするとともに、定期的に島あるきイベントも実施している」とのこと。「今年の芸術祭でもおせたいや花壇の手入れを行うとともに、若い人たちにアート以外の面でも高見島に興味を持ってもらえるよう努力したい」と意気込んでいる。



3/立派な居様の中塚氏邸 4/さざえ隊。左から2番目が西山さん、その後ろが菅原さん 5/さざえ隊は除虫菊畑を復活させる活動も行っている 6/昭和中期、除虫菊栽培が島の一大産業だった 7/さざえ隊オリジナルグッズの一つ、「とびねこ」 8/さざえ隊がつくった港近くの花壇。島内にはこうした花壇が多数ある 9/塩飽諸島ならではの郷土料理、茶粥。波布茶や碁石茶などで米を炊き粥にしたもの。島によって趣向が異なり、高見島では米と一緒にサツマイモを入れて炊く

高見島応援団「さざえ隊」

◎http://sazaetai.com

高見島 たかみじま

総面積2.33平方キロメートル/人口46人(2015年4月1日時点)